

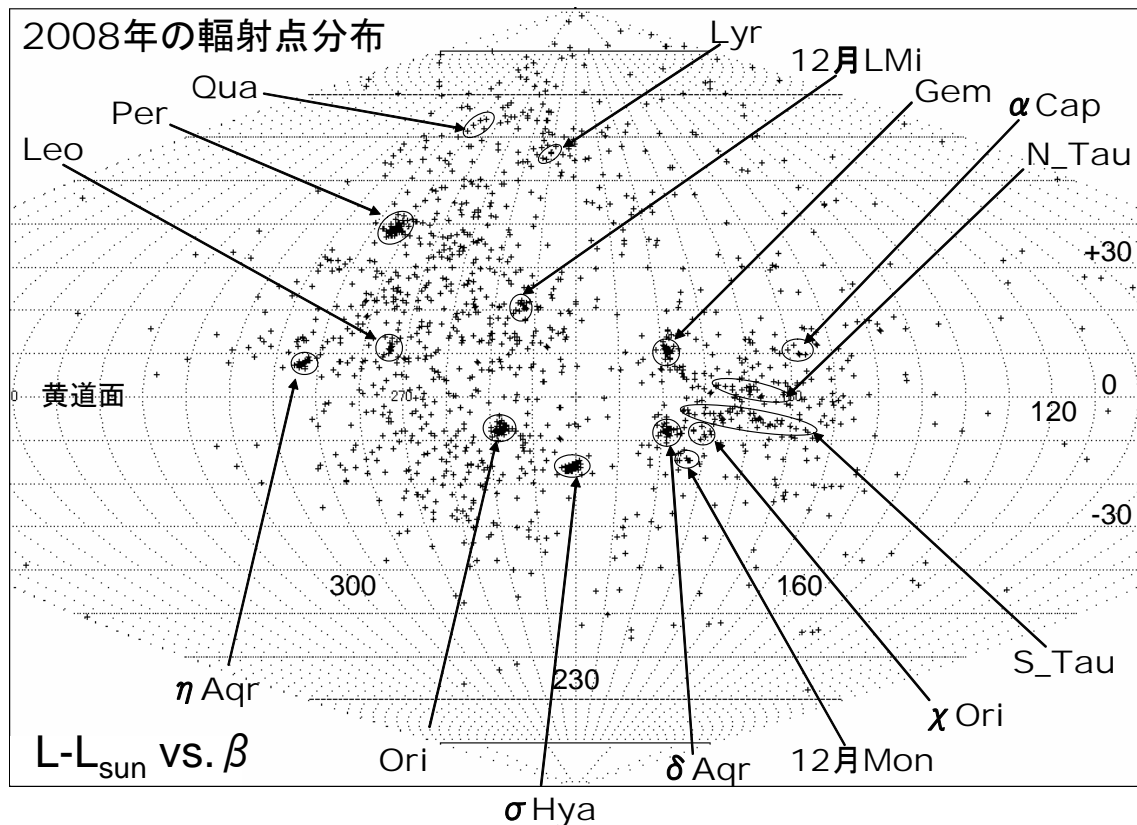
2008年にUF0captureを用いたビデオ流星観測で、成立した同時観測の結果をまとめます。データは宮崎市の私の4台のカメラによる20744個の流星、熊本市の影山和久氏（熊本県民天文台）の2台のカメラによる5606個の流星、福岡市の白石茂孝氏（1, 2, 8, 9月）の247個の流星、および岡山県の横道順一氏の観測（11-12月）による455個の流星を用いました。データ解析、作図はSonotaCo氏のUF00rbit2.04-2.21を用いています。

同じ流星も含めて延べ27699個の流星より同時流星の可能性の高い組が2528あり、流星経路0.9度以上、継続時間0.09秒以上、交差角5度以上の条件で、計算された流星高度が50-200kmのものを同時流星としました。全部で1630個ありました。昨年(2007年)は交差角5度以上の条件だけをつけて、1781個の同時流星だったので、少し増えています。

右の表に5個以上の流星が群と判定されたものと散在を挙げます。もちろん極大日の天候に左右されるので、これが活動状況ではありません。毎月の輻射点報告とは散在流星源の判定法が異なるので、少し数が違ってきます。(特におうし群) QLEDCPKOTLGUの12群を主要群とすると、

2008年に同時観測された流星

群/散在	流星数
散在	1169
オリオン	92
ペルセウス	79
うみへび	44
おうし南	40
ηみずがめ	32
ふたご	27
δみずがめ	25
おうし北	17
χオリオン	17
12月こじし/かみのけ	15
しし	9
こと	8
いっかくじゅう	8
四分儀	8
やぎ	8
全同時流星数	1630



10 群はこの中に含まれますが、はくちょう群とこぐま群はそれぞれ、1 個と 2 個で入りませんでした。主要群以外ではうみへび群の多さが目立ちます。この群や 12 月こじし群、 η みずがめ群、オリオン群などのように出現期間が長く安定出現する群が TV 協定観測では、多く捕えられるようです。

流星の出現した時刻の太陽黄経と輻射点の黄経の差 ($L-L_{\text{sun}}$) vs. 輻射点の横緯 (β) を図に示します。(0, 0) の位置 (図の外) が太陽の位置に相当し、(180, 0) が反太陽方向 (Antihelion)、(270, 0) が地球向点 (Apex) になります。表の群の位置も示しました。散在流星源についてみて見てみると、南北のおうし群に重なって、(195, 0) 付近を中心にアンチヘリオンからの散在流星 (ANT) が多いことが分かります。南北 Apex と言われている (270, ± 15) 付近は確かに多いのですが、ANT 程周りの領域より集中している感じは無いようです。(240, +65) 付近の NToroidal は少し集中があるように見えます。